

# 中国・台湾訪問記 再来一杯茶 《8》

(お茶をもう一杯下さい)

## ※台湾・高雄の由来

初めての海外出張で、台湾の高雄(たかお)に入国した。初めての海外経験なので、飛行機から降りて入国審査書類を書くのに戸惑った。海外出張経験豊富な同行者に、到着地の地名を尋ねたら「カオション」と答えてくれたが、スペルが分からないので「スペルを教えてください!」と尋ねた。そしたら「漢字で書けば!」。「漢字でカオションはどう書くの?」とまた尋ねて、ようやく高雄がカオションだと分かった。このようにして無事に高雄に入ることができた。

高雄の子会社と打合せの途中で昼食になり、近くのレストランに行った時だ。食事の談話中に、突然外が騒がしくなった。何事かと思ったら、工場の近くが火事になったとのこと。一緒に食事をしていた現地の会社員全員が工場に走って行った。残



お寺でお参りする人(台湾)

されたのは我々日本から訪れた数人である。しばらくしてから「工場は無事だ!」と現地会社員がバラバラと戻って来て一安心した。

さて高雄であるが、数度台湾を訪問した後、高雄の名前の由来が分かった。元々の地名は「打狗(ダーグオ)」だったそうだ。打狗は「犬をたたく」の意味で、中国南方の訛りでは「ターカオ」と発音するが、日本人には「たかお」に聞こえる。日本統治時代にそれを知った日本は、犬をたたくは良くないので「たかお」に対して同じ発音で別の漢字の「高雄」を贈った。

高雄の中国語は「gao xiong:ガオション」と発音するが、多くの日本人には「カオ・ション」に聞こえるため、今ではこれが一般的になった。勿論「たかお」でも通じる。

## ※香港で唐詩のCDを買う

ある日香港から深圳に電車で行くために駅に行った。そしたら屋内改札口の手前の広場でCDを売っているコーナーがあった。それらの中で『念唐詩三百選』があったので、その内の1組を買った。日本では中国の詩を漢詩と言うが、中国では漢時代の詩が漢詩で、唐の時代の詩は唐詩と別名である。日本にも百人一首があるが、唐時代の優れた詩を300首集めたのが唐詩三百選である。李白や杜甫の詩は数首選ばれている。

帰国してから早速そのCDを聞いたところ、秋田工業高校の古典の授業で習わなかった、何とも言いようがない快いリズムの詩が入っていた。その詩は『詠鵝(意:がちょうを詠む)』で、その詩と訳を下記する。

詠鵝 作 駱賓王

鵝鵝鵝 曲項向天歌 白毛浮緑水 紅掌撥清波

《訳:王子雲》

ガチョウを詠(よ)む 作 らくひんおう

ガチョウ・ガチョウ・ガチョウ、うなじを曲げて天に向かい歌う。

白い毛が青い水に浮かび、紅(あか)い掌(て)で水を掻いて波にする。

何故心地よい詩なのか、早速詩の分析に取り組んだ。2行目末尾と4行目末尾に押韻するのが定石だが、「歌」と「波」は全く違う韻である。多くの唐詩は各行の2と4語目に抑揚を整えるため、平仄(ひょうそく)と言われる平音と仄音を交互に配置するがこれは問題ない。このように押韻無しで何故快い響きなのか(?)理解できないで数年経過した。しかしある時に「ハッ!」と気が付いた。もしかして、換韻(かんいん)しているのではないかと思いついたのだ。長い詩に同じ韻を続けるのが難しいため、途中で韻を変えるのが換韻である。果たしてこんなにも短い詩で換韻しているのか、早速分析に取り掛かった。

結果、最初の「鵝」を3度重ねて、この韻を印象付けて2行目の末尾の「歌」と押韻しているのが理解できた。3行目の末尾は押韻してはいけぬ所なので、韻が異なる「水」にしている。次は4行目で換韻であるが、いきなり別の韻の語を置いてダメだ。そこで最後の行の3文字目に「撥」を置き、同じ発音の末尾の「波」と押韻することで、換韻を明確にしている。まさかこんなにも短い詩に換韻しているとは気が付かなかった。また加えて2行目の「項」と「向」は同じ発音なので、詩全体が快いリズムになっている。

CDにはこの詩の解説がされていたが、中国語のため聞いても良く分からないので、長い間聴く耳を持たなかった。しかし何回も聴いて驚くべき解説をしていたことに気が付いた。作者の父が歌会を開いた時に、7歳の作者に作詩を勧めたところ出来た詩とのこと。驚くべき才能だ。

この詩を中国人に知っているか片端から確認したが、不思議な結果だった。中国大陸以外の台湾やマレーシア出身の華僑の人は100%知らなかった。ところが、中国大陸出身の人は100%知っていた。何故知っているか尋ねたら、小学校低学年で習ったそうだ。私の世代の日本人に例えれば小学校1年生で習った『さいた さいた さくらがさいた』みたいなものだろう。



中国周口店遺跡

## ※香港から深圳へ

月曜日に香港で会議があり、前日の日曜日の夕方に入国した。香港ではいつも九龍(カオルーン)のホテルに宿泊する。そのホテルの隣が、香港の会社の事務所だから非常に便利だ。さて日曜日の入国なのでその日は仕事がないため、上長と一緒に香港島に散歩に行った。香港島の九龍側の海に近い広場は、ビクトリア公園で日曜日になるとフィリピンから出稼ぎに来ている家政婦達が敷物の上で、一日中食べながら友達と話をしている光景が見られる。ところが今回はその光景が見られず、広場から溢れて道路にはみ出している大勢の香港人がマイクを使って何やら大声を出していた。何しているのか興味があったが上長が「ちょっと怪しいから立ち去ろう」と言ったのでその場を離れた。翌日の朝、新聞を見てびっくりした。昨日の集会は、その前の週に釣魚台島(日本名:魚釣島)に行った香港人が海に飛び込む時に、ロープが絡み死亡した人の抗議追悼集会であった。その場を早々に立ち去って難を避けることができて安堵した。

月曜日の打合せが終わって翌日に深圳に向かった。いつもは九龍から電車で深圳に行くが、中国と香港は同じ国だが、イギリスから中国に香港が返還される時に50年間体制を変えない約束があった。そのため香港と深圳の間には、出入国審査カウンター(イミグレーション)があって、外国から入国すると同様パスポートの提示や入国理由などが質問される。同じ国なのに面倒なイミグレーションを通ると目の前は深圳の入口である。深圳は鄧小平が作った経済特別区である。経済特別区が設定される前の深圳はわずかな農民が住んでいるだけであったが、特区のお陰で突然寒村に東京に匹敵する大都会が出来たようなもので、数か月毎に深圳に行ったがその都度町の風景が変わっていて新しいビルが増えている。

ビル建設の工事方法は香港と同じで足場は竹である。鉄パイプの足場が当然と思っている自分には、危険な竹の足場が理解し難い。また町の人達は皆生き生きとしていて活気が感じられる。鄧小平の先富論(先に富める人は先に富め)が、中国人に与えた影響は絶大であったと深圳の人達を見ると感じた。



北京の通勤風景

## ※北京から汽車に乗る

聞くと話しも中国語があまりできないので不安であったが、北京に滞在していたある日、中国の汽車に乗ってみたいと思って天津へ一人旅をした。まず北京駅の切符売り場に行ったが、自動販売機は無く、現地人は穴の開いたガラスの向こうに居る切符売りの人に大声で叫んでいる。私も真似て大声で「一張到天津、用軟座(軟座で天津まで1枚)」と話をしたら一発で通じた。中国の汽車の席は軟座と硬座があり、軟座とは布張りの柔らかい椅子のことで硬座より料金が高い。切符を買って駅の構内に入ったが、入口には鉄パイプが縦に数本埋め込まれていて、左右に曲がって狭い通路を進まなければならない、スムーズには入れないようになっていた。これでは大きな荷物を持っていると不便だ。その不便な所を通って構内に入ったら、首都駅なのに中がちょっと暗い。切符を提示してから、指示のままエレベーターで2階に登った。日本と同じようにすぐにホームに降りられると思っていたが、ホーム入口の階段が封鎖されていて駅員が見張っていた。どうも発車まぢかにならないと乗客をホームに下さないようだ。安全管理上から言えば、日本方式よりも良いかも知れない。しばらく待機していたら、発車の10分位前にホームに降りる階段の入口の封鎖が解除されたので他の乗客と共に階下へ降りた。階段を下りて自分が乗る軟座の車両を探したが、駅員が各車両の前で案内してくれて自分の車両が直ぐに分かった。軟座車両は全指定席だったが、自分の席に座って数分で汽車は動き始めた。いよいよ緊張の旅が始まったのである。車内放送には、下車する天津駅を聞き洩らさないように全神経を注いだ約2時間の旅であった。そうこうしている間に天津駅に着いた。天津駅から外に出る時に、北京駅に在ったのと同じあの邪魔な鉄パイプを避けながら通った。

北京で予約していたホテルに行くのに、天津駅からタクシーを使った。天津のタクシーは北京で使い古した車と聞いていたが、乗って驚いてしまった。車内は数十年使い古したようでポロポロだ。おまけに料金メーターが外れていて、ふらふらしている。運転手は「料金メーターが使えないが、大丈夫!」と…。

何が大丈夫なのか?これは「きつとぼられるぞ!」と思ったが、ぼられても大した金額でないだろうと思ってそのまま運転手に任せることにした。さて目的地に着いたら、ぼられると思込んでいたが意外にも料金は安く一安心した。このように、外国で汽車に一人で乗った天津の旅の体験ができた。

## ※故事成語

故事成語とは日本のことわざのようなもので、古代中国発祥の教養である。故事成語は日本でも良く知られているのが多くあり、日本と同じのもあれば微妙に異なるのもあって面白い。

### (1) 復水盆に返らず(中国:復水難収)

周に仕官される前の呂尚は、仕事が無く日々魚釣りをしていた。そんな呂尚に妻は離縁を申し出て別れた。その後呂尚は周の文王に見いだされて気に入られ「先王(大公)が望んでいた人だ」から太公望と言われるようになった。釣りが好きな人を太公望と言うのはこれからきている。周は彼の戦略で殷を破り、一国を得た。国を得た太公望に離縁した夫人が復縁を申し込んだが、太公望は盆の水をこぼして「こぼした水を盆に戻せば求めに応じよう」と言ったことから出た成語である。意味は一度破綻したことは元に戻せないである。

### (2) 糟糠の妻(中国:糟糠之妻)

後漢の光武帝(前6年~57年)の寡婦になった姉を、宗弘(そうこう)に嫁がせようとしたが、宗弘には既に妻がいて貧しい時から共に苦勞してきた「糟糠の妻」を下すことが出来ないと辞退した故事からの成語。実に立派な断り方で感服する。

なお「糟糠」とは酒粕と米ぬかのことで貧しい食事のこと。

### (3) 曹操の話をすれば曹操が来る(中国:説曹操来曹操)

曹操は三国志に登場する魏の英雄で、日本のことわざの「壁に耳あり」と同じ意味で、日常会話でよく使われるが日本ではあまり使われない。

## ◇最後に

8回掲載させて頂いた「再来一杯茶」は今回が最後の寄稿です。秋工の古典の授業で漢詩に興味を持ち、また仕事でも中国と関係が深かったことから、台湾・香港と中国に出張も多くこの時に得た体験記を書きました。一部難しい所もあったと思いますが、長い間掲載頂き有難く思います。

## ● 記事寄稿者

嵯峨 良平 (昭和43年電気科卒)

